

私は旧満州の大連市で生まれたが、両親が大分県出身だったので、国東半島の付け根の杵築市に引き揚げ、ここで19歳まで育った。大分県人などを意識したことはないが、私の故郷は杵築市であり、大分県人であることに間違いない。

米国人のエドガー・A・ポーター氏と中国人のライアン・ポーター氏夫妻が『戦時下 占領下の日常 大分オールラウンドヒストリー』を上梓した。大分県の市井の人々を中心にインタビューし、新聞記事、米国人の証言などから、日本の戦中・戦後の歴史を浮かび上がらせている。大分県を取材したのは、夫妻が大分に住み、人脈があったかららしい。

日中戦争の時、大分県出身の広瀬中佐は、旅順港閉塞作戦のため爆薬点火を命じた杉野上等兵が戻って来ないので、「杉野よ、何処」と叫びながら捜したが見つからず、彼自身はロシア兵から銃撃を受け戦死した。部下思いの彼は日本最初の「軍神」になった。日中戦争の時も、大分県人で組織された連隊が大活躍した。それは、中国人を大量に殺害したということであるが、軍人になって活躍する人が多かった。敗戦末期の御前会議に、阿南惟幾陸軍大臣、梅津美治郎陸軍大将、豊田副武海軍大将が出席しているが、彼らは大分県出身で、無条件降伏を求めるポツダム宣言受諾に反対し、徹底抗戦を主張していた。田舎の県出身者が、国の運命を決める大事な会議に出席している。大分県からは軍人が多く輩出していることは確かである。大分県は経済的に貧しかったので、軍人を志願すれば、経費がかからず、努力すれば出世できたという見方もある。

本書は、真珠湾攻撃の演習をした、大分県の南の港、佐伯のことから書き始め、敗戦後の米軍占領時代までを描いている。初めは、勝利に酔いしれ喜びに沸くが、兵隊に取られ、戦死する人が増えていき、大分、宇佐、佐伯など、航空基地があった地域は米軍の猛爆を受け、県民は悲惨な体験をしている。その中で悲劇的な出来事は、天皇の「詔勅」が出され、敗戦が決まったにも関わらず、これを認めることができず、大分の海軍基地から「特攻隊」が出撃した事件である。宇垣海軍中將は「玉音放送」を聞いた4時間後、最後の出撃を敢行した。彼に従って、11機の爆撃機に22名の搭乗員が乗り込み、沖縄の米艦隊を目指した。装備が不十分で3機が不時着し、5名が生存できたが、米艦隊までは行きつけず、海や山に墜落していった。戦後は、食料不足と米軍駐留による混乱、そして、米兵を相手にした「パンパンガール」の悲劇があった。大分県人は純朴で、国が決めた国策に、否応なく順応し、最初に感じた違和感も次第に日常化していく様がありありと、オールラウンドヒストリーとして描かれている。国策に批判なく従わざるを得なかった国民の姿である。

私の故郷・杵築市出身の堀悌吉海軍中將という人がいた。彼は、山本五十六海軍大将と兵学校の同期で、頭脳明晰な人だった。日独伊三国同盟や米国との開戦に反対し、左遷させられた。リベラル派は更迭させられる時代であった。私の求道を親切に支えてくれた堀澄子姉の親戚に当たり、平和を求めた同郷人がいたことは嬉しかった。

著者ポーター氏は、現在の日本の政治を批判して、下記のように書いている。「戦時中のリーダーたちの役割を明確に判断することができていないまま、時間的にも意識的にも真空状態が生まれてしまった。しかし、真空状態はそのままでは収まらない。国家主義的な人々がこの空白を埋めることを画策しはじめた。こうして戦争の恐怖をうまく言いつくろい、日本の平和憲法を改定して、より大きな軍事力をもとうとしている。その結果、日本はアジアの隣人たちから孤立し、正直な評価を叫ぶ声を抹殺しようとしている。」

日本は平和憲法を堅持し、アジアへの謝罪、贖罪の意思を明確に表すべきではないか。